

急ぎ過ぎだよ 人類は。

ゆるやかなネットワークを目指す

ITより
逢ひてエ

雑報 繁文

No. 699

2025年4月

も・く・じ

- ・「寂聴97歳の遺言」ほか 12
- ・ち便りから 6
- ・延尾高原スキー＆スノーシュー 14
- ・寺泊住吉屋 16
- ・有機農業者と消費者の集い 20
- ・山仕事(3月、薄瀬) 24
- ・けいじばん 26

いろいろ考えがあまから面白い
いろいろ人がいるから楽しい

編集・発行 鈴木厚正
〒266-0005 千葉市緑区菅田町2-21-359

T&F 043-291-2917

心
はい
もし
山頭火

泉ゆきを
書画



泉ゆきを『じはいもし山頭火』
日本習字普及会

メール配信をご希望の方は、

<suzukikosei.san@gmail.com>へ。

三宅伊都子さんか

応対してくださいます。

題字 故佐村隆英和尚(千葉県長柄町本光寺住職)
力ツト 故泉ゆきをさん(にっぽん箱絵の会会長)

印刷機 リソグラフ RZ 330

※この号の切手はグリーティング春。

山仕事(3月、薄場)

3月6日(土)、くもり。東京駅地下の「まい泉」で、カキフライ➕とカツサンドを購入。「こだま」は空いていた。

敷地駅でス米さんに迎えられ、車で浜松市の聖隸三方原病院へ。山崎さんは休み、若林さんは明日から、竹中さんは午後用事とあって、東江、東田さんとぼくの計4名だ。意外に遠く、1時間ほどかかった。大きな病院で、ホスピス棟はその端にある。

正士さんは、1月、2月の頃より元気に見えた。東江さんが「後刻、「きれいだった」と言った。確かに、身なりも家に居た時よりきちんとし、すっきりした感じだった。

部屋は個室。ベッドのほかに卜上部のよくな2畳敷がある。家族が泊まる場合もあるのだろう。廊下を背にして小さいが流し台と冷蔵庫があり、自炊も可能。床暖房もあり、なまじのビジネスホテルは額負けだ。

以前は外出や訪問も自由だったが、「コロナ」以後、出入りが厳しくなったといふ。今回の訪問も、医師が仲々来と言わず、「山仕事の打ち合せ」ということでやっと許可が出たそうだ。人数も、当初は2名までと言われたが、正士さんが粘り、2名が3名、さらに4名まで認めさせたといふ。正士さんの粘りが目に見えるようだ。その後、溝口久さんからも見舞いの希望があったが、頑として応じなかつたらしい。悪い久さん。

いろいろ話をきいた。食事はもちろん、風呂もちゃんと入れてくれ、当面不自由はないようだ。正士さんらしく、パソコンを持ち込んで確定申告の作業をしようと、10万円以下の場合は申告不用ときいては、とした。それとも暇がないと、正士さん。

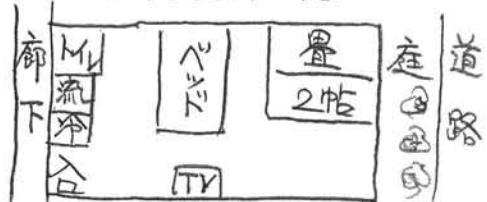
会話時間は15分ということだったが、とくに注意もなく1時間が経過した。
別れ際、3月13日で76歳になる正士さんに、ス米さんの音頭で「Happy Birthday」と合唱。おまけに「四捨五入すると77歳ね」とス米さん。また会えるといいね。

帰り道。遠鉄ストアで買物をし、16時過ぎ正士さん宅着。啓史さんから鍵を預り、ほぼ以前と同じ様に利用できるようになったのがありがたい。

短い時間で東江、久米さんが夕食を調えてくれた。その頃には竹中さんも到着。

(夕)刺し身(カツオ、メバチマグロ)、天ぷら(フキのとう、竹の子、舞茸)、鳥じん(以前、熊谷道子さんから頂いた南信名物。鶏肉と野菜をそのまま炒めようになつてゐる)、白菜漬け。

20時頃、勤めり帰りの啓史さんも参加。回を重ねる毎に、打ち解けてくるのが嬉しい。夜は3人。ゆっくり寝る。だが、夜中3度足がツリ、困った。



京都の前田聰さんが送ってくれたピクチャーマップを、原田さんと竹中さんに託し、研究してもらう。本『琵琶湖』は、原田さん→竹中さんと回覧の後、お返します。

5月7日(金)、晴。心配した風もなく、ありがたい。

いつものように午時、姫屋へ行く。新聞がないのが残念で、テレビを見る。こうして、たまには家に風を入れるのがよいと答史さんも分かってくれている。

例によて6:30、原田さんが朝食を用意してくれ、若林さんと4人で食べる。食後、若林さんの車で薄湯の竹中さん宅へ。康江さんは久米さん宅へと別れる。今回は、竹中さんの姫屋奥にある小屋の取り壊し作業だ。姫屋の裏、蔵と竹や竹の間に、2×4間(8坪)ほどの小屋がある。立っているといふより、図のようく傾いている。すぐに周囲の廻柱は
とり除かれており、内部には古材がうす高く積まれている。



一度に引き倒すと危険なので、竹中さんの計画に従い外側から少しづつ取り壊していく。ぼくは、こうした「ぶっ壊す」ことが大好きだ。政治の世界にもそんな人が居たっけ。

屋根柱はすでに撤去されており、むき出しえなった垂木とブルーシートがおおっている。そのシートもボロボロだ。垂木を固定しているのは、和釘だった。釘金をブツブツ切った洋釘と違って、和釘は鍛造する。現在では、木造船か社寺にしか使われていないようだ。改めて見ると、小さな建物にしては柱も梁もしっかりしている。ほどほどのお住まいだったのだろう。



垂木は下から掛け矢を振り上げて外す。柱は根元が腐っており、腐った部分を切断した後、ロープをかけて4人で引き倒す。次々に出て廻柱は、姫屋の軒下を通って軽トラックに積む。さんはいっぽい廻柱を持つが、ぼくはその半分ほど。力の差がありありだ。

11時頃、水窓(みこくぼ、もう覚えてくれない)から守屋千づるさんと中谷今朝菊さんがご馳走を持って見えた。熊谷道子さんは葬儀で、竹中れい子さんは夫君と通院で来られなかったとのこと。久米さんの座敷にみんなが並んでいた。



(2) 手巻ずし(マグロ赤身、中トロ、ヒラメ、イカ、トビコ、すき身)、

メサバ、切り干し大根の煮付け、こんにゃくの油炒め、人参と大根

の酢漬けに熊谷道子さんのホテトサラダという豪華版だ。水窓は山の中なのに、どうして鮮度のよい魚が買えるのだろう。



デザートは、内田美智子さん(埼玉・川越市)からのお饅頭。意地汚いぼくは、またし食べ過ぎた。

午後も作業を続け、小屋の姿は消え失せた。

廃材は、使えないものは庭に残し、大部分は一段下の空地に運び、後日、少しづつ燃やす。トタンやブルーシートは分別して後日、処理を依頼する。残るのは土砂に混じった細かい木つ端くらい。これは明日、桜の下に散布の予定。

16時、作業をやめ、皆で「あらたまの湯」へ。

湯から正士さんちに戻り、久米さん、東江さんが手早く用意してくれた夕食。

(夕) 新玉ねぎのスープ煮、ブリの照り焼、カブの甘酢漬け、白菜ヒキクラゲの中華炒めとおにぎり。

5月、水窓で茶摘みの手伝いをしようと話が生る。東江さんは、熊谷さんが育てている千里ゴマの花を見て「石本」のつぶしよくをたべたいという。

賑やかな夜だが、なんだか足りないような……。

5月2日(土)、ぐるり。若林さんの車で薄瀬場へ。庭に置いた柱など大きな廃材は、チェンソーで腐った部分をカットし、畠や果樹園に行くときの階段用に取っておき、使えない部分は焼却場所に。原田さんとぼくが担当。木つ端のまじ、大土砂は、竹中さんと若林さんが。カットする

11時、あらかた片付いた。すごい力だ。これで猫の手クラブは、家屋解体とまちひとつウイングを抜けた。

(昼) カレーライスに、サラダと玉子焼。

敷地駅に向かう途中、西田さんのお宅へ。娘さん(といいでも6歳以上か)が出て、9歳のお姉さんが「メリれないカキクリ園へ行ってほしいとのこと。

敷地駅で、久米、竹中、若林さんに見送られる。このあと、正士さんちに戻り、掃除と戸締まりをしてくださいました。